

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と

顯密二種の「多宝塔」

阿 部 龍 文

多宝塔と呼稱される塔には二種ある。その一は、法華經宝塔品に由来して二佛並座像（又は多宝如来一尊）を奉安するもので、第二は、高野山根本大塔を多宝塔と稱したことから、これを小形にした塔をも多宝塔と呼び、塔の形をさす呼稱である。第一の多宝塔には古来特定の塔形はなく我が国に於ても伝教大師の多宝塔も多宝塔形の塔ではない。第一は顯教の塔であり、第二は密教の塔で佛三昧耶形の塔である。弘法大師創建による大塔は、三昧耶曼荼羅の大日如来の三昧耶形を単に立体化したものではない。これについて創建大塔の建築の上からと、法を、所詮、能詮、行法、行果から見て所詮の法爾の曼荼羅が、能詮絵図の曼荼羅として描かれ、大師の行法を通じてその行果の具体としての根本大塔をその内面から検証し、その誓願を明かにする。

尚、本稿第一部として、見宝塔品の多宝塔に特定の塔様はなく、多宝塔形佛塔は、高野山大塔を起源とする密教の塔であることについて平成七年度智山勧学会に於て発表した。

顯密二種の多宝塔（第二部）

弘法大師による「毘盧遮那如来法界体性塔」の創建

—多宝塔形佛塔の起源として—

仏塔は、佛涅槃後に造立された八基のストウーパを起源として、その後、アジア全域に亘って夥しい数の塔が

建てられた。その形の上でも実に多様な塔を生み出した。しかし、これらの塔はすべて顕教の塔である。(一)この塔の長い造顕の歴史の中で、はじめて、全く新たな塔が創出された。弘法大師による「毘盧遮那法界体性塔」である。その名が示す通り密教の塔である。塔建立の理念に於ても、その塔様に於ても、全く独自の未曾有の塔が顕現したのである。この塔は、その後、高野山根本大塔と呼ばれ、高野山大塔、または大塔と略称されている。

この大塔と、これを簡略化した塔を様式の上から多宝塔と称している。(二)

高野山大塔には、二つの伝えがある。(三)その一つは、南天の鉄塔に擬したとするものであり、他の一つは、金剛界曼荼羅の大日如来の三昧耶形を象つたとするものである。この伝承が、根本大塔の建立にかかわりのあるものであるかどうかは、弘法大師の毘盧遮那法界体性塔の創建の意図と理念を探ることで自ら明かになる。

高野山上にはじめて建立された塔の規模と形容とは、現在の高野山大塔によって或る程度知ることが出来る。

この大塔は昭和九年の弘法大師の一千百年の御遠忌を記念して建てられた。この塔は、六度目の再建で、鉄骨鉄筋コンクリート造りに一部木造を併用したための堅さがあり、又亀腹の位置に問題があるが、創建以来の規模で、その形も創建塔を考察して建立されたものである。(四)

弘法大師創建大塔がいつ完成したかは、不明である。承和元年の知識書に、「不日にして成る」としているのであるから、大師存世中との寺伝も必ずしも否定できないものがあるが、今は御入定後と推論されている。(五)

創建大塔は、正暦五年(九九四)落雷のため失われたが、それから約百年後の嘉保二年(一〇九五)から再建にかかり、建築は約五年で終って、それから内部の彩色荘厳と、奉安の尊像の造顕等に三年を費やして、康和五年(一一〇三)に落慶供養が営まれた。非常に短時日で行ったこの再建が、旧規に則って行われたとするその記録が嘉保康和の記録である。これにより創建大塔のかかなりの詳細を知ることが出来、これに基いて足立康博士が、創建大塔を次のように推論された。(六)

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

一、形式 多宝塔、すなわち裳階付宝塔、屋根檜皮葺

一、全高 十六丈

一、基壇 方 九十六尺

下壇 廣 八丈

一、裳階 方 五間 各面 三戸 両脇 連子

各辺 八十尺

柱 二十本 高 二十尺 径 二尺

*扶柱 四本（嘉保記録のみにあり）

一、母屋 平面 円形

佛壇柱 四本 断面 八角形 径三尺 高三二尺

母屋内柱 十二本 断面 円形 径三尺 高三二尺

水輪柱 十二本 断面 円形 径三尺 高三二尺

一、心柱 本七丈 末一丈三尺

一、相輪 高 五丈

一、本尊 胎界五佛

中尊 法量約九尺 台座五尺五寸 光背高一丈五尺五寸

四佛 法量約七尺 台座四尺五寸 光背高一丈二尺

足立博士は、これをもとに復原図を作成し、その平面図と立面図を掲載している。

康和の記録の「水輪柱」というのは、平面図の二重円陣に配された外側の十二本の柱の事である。

創建大塔の平面は（掲載平面図は足立、清水両博士の図を筆者が修正）三壇から成っている。最中央壇は八角壇、次が輪壇、裳階平面が方壇である。輪壇で八寸高、更に八角壇がこれより一尺余り高くなっている。方壇は胎藏壇、輪壇は金剛壇である。柱は四十九本、扶柱を入れると六十一本という柱の数の多さは、未曾有である。全高三百三十三尺という東大寺七重塔でも二十九本にすぎず、大伽藍である東寺の講堂でも四十二本である事を思えば、この柱数は異例である。中央の心柱は大日如来、これに四方四仏の像が安置された。八角壇四隅の四本の柱は、四波羅密である。又、薩・宝・法・業の四菩薩を兼ね、内側内陣の内陣柱十二本は、王・愛・喜・光・幢・笑・利・因・語・護・牙・拳である。水輪柱の十二本は内外八供と四攝の菩薩である。方壇二十柱は、外金剛部二十天である。この金剛界に対し、方壇の中央に八角壇を一壇高く設け、中台八葉院とし、柱と平面とを以て、金胎重々無尽の不二を標したものと推定される。こうして見ると、大塔が徒に巨大な塔の建立を意図したものでなく、平面においても方八十尺を必要としたことが、これによって首肯できるであろう。

次に、立面図を見ることにしよう。この図で注意すべきことは、亀腹が十二本の水輪柱の上部をなしていることである。（七）

「御手印縁起」に創建大塔として二様の図が示され問題になっていた。一つには、復原図のように裳階のあるものであり、もう一つは裳階のない宝塔形の塔である。宝塔形の塔が金剛界大日如来の三昧耶形の塔である。

今、復元図の塔の裳階を取り除けば、大日如来の標幟の宝塔形佛塔が顕れる。

そこで、水輪柱という名称であるが、宝塔の塔身を形成する柱を水輪柱として示していることは宝塔の塔身を水輪と示していることである。水輪は五輪の一つであるから、塔が五輪塔であることを暗示している。そこで五輪は、地輪が裳階の立方体であり、火輪は初層の屋根がなす三角形、風輪は上層の屋根（創建塔では屋根は伏鉢型になっている。）（八）空輪が相輪上の宝珠である。大塔は、塔様に於ても、金剛界佛三昧耶形の宝塔であると同時に、

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

胎藏大日如来を標幟する五輪塔でもあるのである。「御手印縁起」の二種の塔は、理念図であって金剛界の大日如来の三昧耶形を主体として、胎藏大日の標幟の五輪塔を合一させたことを表している。(九)

方三間の多宝塔でも「宝塔」の頭頂部である亀腹をその大きさはともかく必ず設けて、金胎合一の塔である事を表示している。その中でも石山寺、浄土寺などの多宝塔では、亀腹を特に大きくしてこのことを強調している。金剛三昧院塔は創建大塔にならって、水輪柱を予想した位置に亀腹を置いた唯一の塔である。

大塔が、密教の塔であることを相輪でも表示している。これまでの塔の相輪は、我が国では、下から、露盤、覆鉢、受花、九輪、水炎、竜車、宝珠として形式化した。これに対して大塔では、九輪の上に、四葉、六葉、八葉とし、その上に、炎光を放つ大宝珠を安じている。九輪は、九識および、中台八葉院の九尊で、その上の四葉は、天部の華座である一葉を東南北西に配したもので二十天を表し、六葉は明王部、八葉は佛菩薩の華座である。八葉は不動明王の華座でもある。大塔相輪は、胎藏九尊を表示する九輪上に、天部、明王部、佛菩薩の花座を飾り、その頂に、大菩提心を表する大宝珠が遍法界の炎光を放つのである。「分別聖位經」に「光明遍く覆うこと塔の相輪の如し、光明より十六大菩薩及び八方等の大護を流出し展転して光を出す。」と。

大塔、多宝塔では、相輪上部より、四方の棟に立つ宝珠へ宝鎖を張り、鈴鐸を下げている。これは三昧耶形の制底に描かれているもので、莫高窟の塔にも見られ、チベットの立体曼荼羅にも見られるものである。四方の棟の四顆の宝珠は、相輪上の宝珠と五峯を成し五智如来であるので、宝鎖は、大日如来と四佛の相互供養を表している。棟の四は、四印を表している。鈴鐸、風鐸は、諸佛諸菩薩の真言の響き法界に遍きことを表し、塔の至るところに、金胎不二の密意を籠めている。

弘法大師が東寺を賜ったのは、高野下賜より七年後の事である。それより造営を進めて三年後に、五重大塔の建築にかかっている。従来の五重塔の形式を依用したこの塔でも五重に五輪を表し、金剛界四佛をはじめ、塔に

は大日如来を奉安し、塔様の如何を問わず、密教の塔とした。この後、台密に於ても、慈覚大師の叡山東塔に胎藏の五如来を安置して以来大日如来を塔の本尊とする例が多くなった。

東寺に伝わる鎌倉時代の雛形の五重塔（小塔）には、宝鎖が見られる。若しこれが創建以来の事であれば、東寺五重大塔にも、相輪に宝鎖を用いたことになる。

このように弘法大師は、一つの形象を三昧耶形として、その三昧耶心を読みとり、又密意を籠めて一つの造形をされたであろう事は、般若心経や法華経等の顯教の經典をも密教の經典として読み、一つの語句、たとえば「妙法」を「諸仏知見これなり、佛知見は衆生の心性なり」と密意をもってこれを解釈され、更に、中寿感興の詩に見られるように、四十歳から「文殊讚佛法身礼」四十行として、方円二図によりこれを行ぜられたことから理解されることである。

大塔内外至る所に、金胎不二を標幟し、大塔を、金剛界の三昧耶形の宝塔に、五輪塔を合一させたこともそうした密意によるものである。

このことは、安祥寺の塔を毘盧遮那五輪卒都婆と稱したことでもうかがい知られる。普通この名稱から大規模な一つの塔様を想定することは難しいであろう。この塔は、高野山大塔の完成から極めて近い貞観年間に、實慧の弟子で唐僧である恵運によって建立された。本尊は、半丈六の金剛界五智如来（現在国立京都博物館出陳）で、塔は方五間以上という。根来寺大塔に近い規模であった。（十）高野山大塔にならって最も早く建立されたこの塔がその形だけでなく高野山大塔の理念をも汲んで建立されたものである。そう理解してはじめて、この名稱も理解されるのである。

大塔は、総高十六丈方八丈という規模からもこれを建築することは決して容易ではないが、方形の上を円形にし、更にその上を方形にするため、これまでの七重塔にも八角堂にも全く見られない複雑な構造を以て建築しな

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

ければならない。従って、これを構築する複雑な木組みを、まず考案する必要がある、実際の建築に当っては、諸職に対し、細部に亘っての綿密な技術指導が常時行われなければならなかった。これを、殆ど未踏の地を開いて、尚、人蹟も稀であった高野山に建立することは、難事業中の難事業で、多くの困難を克服しなければ、不可能であることは当初から予測されていたところであった。それにも拘らず、高野山の開創そのものが、この大規模の塔の建立にかかっており、それは、たとえどう立地条件が厳しくとも、高野の地でなければならなかった。高野山はそのためにも食された地であった。

弘法大師が、はじめて高野山の結界を行ったのは、高野下賜の翌年、弘仁八年のことである。この結界の啓白文の中で、帰朝より高野下賜までの日々を、「地に相應の地なく、時正しく是なる時にあらず。日月荏苒としてたちまち一紀を過ぎたり」としている。この地この時を得ることが如何に長い宿願であったかが知られるのであるが、高野の地は「空海少年の日、好んで山水を渉覧して、吉野より南に行くこと一日、さらに西に向かって去ること兩日程にして、平原の幽地あり。名づけて高野という。計るに紀伊国伊都郡の南に当れり。四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり。」と、上表文にある熟知の土地である。大師がこの地の開創を宿願としたのは、すでに唐土に於てであったろう。しかしこの十二年の間、第二、第三の地も検討したことが「ト食す」であると思われる。高野は、多年意中にあった最高の地であったが、尚、検討を要したのは、旧都奈良からでさえも遠隔で、「上るにも苦しみ、下る時にも難む深嶽崎嶇」冬は厳寒雪深く、糧食灯油にも事欠きやすい立地条件であったのであろう。それにもかかわらず、高野はト食されたのである。七里四方が結界された。「高野初建立結界啓白文」を先ず掲げよう。

沙門遍照金剛、敬つて十方の諸仏、両部の大曼荼羅海会の衆、五類の諸天、および国中の天神地祇、ならびにこの山中の地水火風空の諸鬼等に白さく、それ有形有識は必ず仏性を具す。仏性、法性は法界に遍じて

不二なり。自身他身は一如と与んじて平等なり。これを覚るものはつねに五智の台に遊び、これに迷うものはつねに三界の泥に沈む。この故に大悲大日如来、ひとり三昧耶の妙趣を鑒みて、六趣の塗炭を悲歎したもう。如実智の雷、法界の殿に震い、秘密の曼荼、閻浮提に伝わる。金剛薩埵、竜猛菩薩に伝授せしより、師相伝して今にいたるまで絶えず。遂使んじて、弘教和尚、弁正三蔵、錫を振つて東来して、漢の地に流伝し、群生を拔濟す。しかりといえども、地、泓海を隔てて、人機未だ熟せず、教、秘閣に韞んで、未だこの朝に及ばず。

某甲、幸に諸仏の加持力と、幽明機熟の力とに頼つて、去し延暦二十三年をもつて彼の大唐に入り、大悲胎藏および金剛界会両部大曼荼の法、ならびに一百余部の金剛乗を奉請して、平かに本朝に帰りき。地に相應の地なく、時正しく是なる時にあらず。日月荏苒として、たちまちに一紀を過ぎたり。ここにすなわち輪王運を啓いてこの法を弘めんと擬す。必ずその地を得べく、四遠を簡択するに、この地ト食せり。この故に天皇陛下、とくに恩璽を下して、この伽藍の処を賜えり。今、上は諸仏の恩を報じて、密教を弘揚し、下は五類の天威を増して、羣生を拔濟せんがために、一ぱら金剛乘秘密教によつて、両部の大曼荼羅を建立せんと欲う。仰ぎ願わくば、諸仏歎喜し、諸天擁護し、善神誓願して、この事を証誠したまえ。あらゆる東西南北四維上下、七里の中の一切の悪鬼神等はみなわが結界を出で去れ。あらゆる一切の善神鬼等の利益あらんものは、意に随つて住せよ。

また願わくは、この道場はあまねく五類の諸天および地水火風空の五大の諸神、ならびにこの朝開闢以来の皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇をもつて檀主となす。伏して乞う、一切の冥靈、昼夜に擁護して、この願を助け果せ。敬つて白す。

この結界により、伽藍建立に向つて、草庵と呼ぶ程の僧房、食堂などが準備された。これ等が営まれて、いよ

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

いよ壇上建立の結界が行われたのである。弘仁九年から十年にかけてのことである。この啓白文（壇場結界文と略稱）も併せて、左にかかげる。

一切の諸仏と般若と菩薩と金剛天等とおよび一切業道の明冥とに啓白す。われ今、この地はこれわが地なり。われ今、七日七夜の都^と大道場法壇の会を立てて、一切の十方法界の諸仏世尊とおよび般若波羅蜜多と諸の菩薩衆の諸の徒衆を領せるとを供養して、一切秘密の法蔵、難思議の法門を決定せんと欲^{おも}う。故に諸の勝成を取つて護身結界の法事を欲^{おも}う。この伽藍の東西南北四維上下において、あらゆる一切の正法を破壊せん毘^び那^な耶^や伽、諸の悪鬼神等は、みなことごとくわが結界の処、七里の外に出で去れ。もし正法を護らん善神鬼等の、わが仏法の中に利益あらんものは、意^{こころ}に随つて住してこの伽藍において仏法を防護せよ。この伽藍の如来像の前において、諸の仏子等同法と一心に仏法を住持して四恩を報じ奉り、有情を饒益せん。金剛軍荼利菩薩の法に帰命して、七日七夜作法結界し、懺悔礼拝す。この院内にありて、東西南北四維上下に、あらゆる一切の正法を破壊せん毘^び那^な耶^や伽、諸の悪鬼神等はみなことごとくわが結界の処、七里の外に出で去れ。もし正法を護らん善神鬼等の、わが仏法の中に利益あらんものは、意^{こころ}に随つて住せよ。至心に三宝殿、恩重の教主釈迦尊と、大威力を具する神呪心と、善護能化の觀世音と、金剛軍荼利菩薩との諸の聖衆と、藥王藥上救脱菩薩との諸の聖衆と、金剛藏王菩薩との諸の聖集と、梵釈四王竜神等の護法の諸天影響衆とを勧請したてまつる。道場に來入し、法事を証成して、わが勧請において哀愍摂受したまえ。

この壇場結界に前後して「秘密曼荼羅教付法傳」の筆が執られ、その後、これを簡潔にまとめた「真言付法傳」を著わしている。初めの啓白文で、この付法傳の肝心をのべている。大日如来が常恒普遍に說法される法爾の法、その秘密の故にこれを秘密曼荼羅教という。この秘密の曼荼羅が現世に伝わったのは、一に大日如来の大悲に発し、金剛薩埵が大日如来に受法し、更に龍猛菩薩に伝受したことによる。このところを大師は「如実智の雷、法界の

殿に震い、秘密の曼荼、閻浮提に伝る」として、付法伝に於て南天鉄塔相承として記すところである。これにより師々相伝して大師がこれを伝えたとして、その法とこれを伝えたのは正しく大師であることを明らかにし、今願うところは、この金剛秘密教によつて、両部の大曼荼羅を建立することである。これが密教を弘揚することであり、群生を拔済することである。両部大曼荼羅をこの地に建立することこそ、大日如来の大悲と法の相承者として今、ここに実現することになるのである。この故に、壇場結界に於て「一切秘密の法蔵、難思議の法門を決定せんと欲う」と啓白されたのである。

高野山では、今も、大塔、金堂（創建時の講堂）の建つ、一段高く築かれたところを壇上伽藍とよんでいる。これが弘法大師が七日七夜の結界を修された壇場である。

この結界の都大道場は、一切諸佛菩薩を攝入する一大曼荼羅である。この大道場壇は方壇で胎藏曼荼羅に他ならない。法壇は円壇で（十一）、ここでは金剛界曼荼羅である。初結界に於て、八葉蓮華をなす高野八嶺を摂めて一大浄域となした。壇場結界にいう、「われ今、この地はこれわが地なり」は、この七里結界の浄地で、その中央に、一大胎藏曼荼羅が築かれ、その上に金剛界の円壇が、建立されたのである。初結界で建立が欲われた両部の曼荼羅が、図画の曼荼羅であるか、或いは二基の毘盧遮那法界塔であるかは、後に譲るとして、今、この結界により、大悲胎藏壇、金剛界法壇の両部曼荼羅が建立されたのである。この都大道場法壇の上に、まず講堂が建立され、東西に二基の両部の塔が建立される。壇場は東西二基の毘盧遮那法界体性塔建立のための壇場であり、伽藍としては講堂の方が従である。

根本大塔の建立を、一切の秘密の法蔵、法雷法界の殿に震つて閻浮提に伝えた南天鉄塔相承から見て行くことにする。

「秘密曼荼羅教付法伝」では、顕密の別、つまり密教の秘密たる所以から説きおこしている。顕教では、応化

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

佛は内所証の法、聖智の境界を説くことがないので、その説くところは随他意のためのもので方便の門である。これに対し、密教は、顕教が不説とする法身の、大日如来が、その自内証である聖智の境界を説くものである。大日如来は、常恒普遍に、真実語、如義語、つまり真言で法を説かれる。その法が、曼荼羅法教である。詳しくは、唯一秘密最上佛乘大曼荼羅法教である。これを秘密というのは、この法が常恒普遍に演説されていながら「しかも機にあらず。時にあらざれば、聴聞し、信受し修業し流伝することを得ない」からである。では秘密の法はいかにして伝えることが出来るのだろうか。「いわゆる道は自ら弘まらず、弘まること必ず人による。誰かよく弘むる者ぞ」と。ここで、「すなわち七箇の阿闍梨あり。上、高祖法身大毘盧遮那如来より、下青龍の阿闍梨に至るまで、嫡々相續して絶えず。これすなわち如来加持力の致すところなり。法の最上なるものここにおいて見えたり。」

秘密の法は、秘密のままでは、流伝することはない。

「広付法伝」は、第三祖龍猛菩薩に於て、「ついに、南天の鉄塔の中に入って親り金剛薩埵に灌頂を授けられ、この秘密曼荼羅最上曼荼羅教を誦持して人間に流伝す。」と記し、更に特に問答決疑を設けて詳述している。

時に竜猛大徳、持誦成就して、すなわち南天竺大菩薩藏の塔の前に至つて、この塔を開かんと願う。七日の中において塔を遶つて念誦す。白芥子を加持して、この塔門を打つ。第七日に至つて塔門すなわち開けぬ。塔内の諸の金剛神一時に踴怒して入ることを得しめず。ただ塔内を見るに、香燈の光明は一丈二丈なり。名花の宝蓋は中に満ちて懸列せり。また讃の声を聞く。

時にこの菩薩は至心に懺悔して大誓願を發す。諸の金剛神、出で来つて問うていわく、汝何事かあると。答えていわく、如来の滅後に邪林繁く鬱にして大乘滅しなんと欲す。これこの塔の中に三世の如来の一切の法藏ありと聞く。願わくは受持して群生を利濟せむと。金剛、命じて入らしむ。入りおわつてその塔ついで

閉ぢぬ。その内を観ればすなわち法界宮殿毘盧遮那現証^{そとば}率都波これなり。

龍猛菩薩が觀見した法界宮殿毘盧遮那現証卒塔婆が弘法大師創建の毘盧遮那法界体性塔であるが、今この塔について筆を進めるまえに誦出した法について、「理趣經解題」の次の文より明かにして行こう。

初めに法とは、この『金剛^{こんごう}瑜伽^{ゆが}經^{ぎやう}』に二本あり。一には広本、すなわち法弘恒説の法曼荼羅これなり。つぎに分流の本、すなわち竜^{りゅう}猛^{みょう}所伝の十万頌の經これなり。この本について十八会の經あり、この經はすなわち十八会の中の第六会なり。また法の中について四つ、一には教法、十万頌の能詮の經これなり。二には理法、十万頌の所詮これなり、三には行法、能觀の三密これなり、四には果法、能行の句これなり。

法佛恒説の法曼荼羅は、法爾秘密の法である。これが、龍猛菩薩により誦持流出されてはじめて教法となるのである。これを大日經解題からも補って表にしよう。

教法	能詮の經	分流の広本	略本
		龍猛所伝の十万頌の經 この經（金剛頂經）及び大日經は竜猛菩薩南天鉄塔より誦出する所の如来秘密藏の根本なり 十万頌能詮の經十八会三百卷	三千余頌の經 頌文三千經卷七軸 略を以て広を攝し少を以て多を攝す

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

理 法	所 詮 の 経	
行 法	能 観 の 三 密	
果 法	能 行 の 句	
		広本 法佛恒説の法曼荼羅 法爾常恒の本 諸佛の法曼荼羅 (法爾所起の曼荼羅人) 自性法身所説秘密真言三摩地門いわ ゆる金剛頂經十万頌の經等 大悲曼荼羅の一切の真言一々の真言 の相とは皆法爾なり(十住心論)
		分流の広本 金剛手誦伝する十万頌所詮經

經に能詮、所詮があるのは、密教に於てはじめてあるので、内所証の法が説かれない顕教に於てはあり得ないことである。

そこで、「付法伝」の先の文を見ると、塔内に入ること拒む金剛神との間に、龍猛菩薩は、「これこの塔中に三世一切如来法蔵ありと聞く」と答えている。三世一切如来法蔵は、未だ「法佛恒説の法爾の法曼荼羅」を知るところでない塔外の菩薩にあつては、三世如来の經蔵としての理解にとどまるのである。龍猛菩薩が塔内に入つて「法佛恒説の法曼荼羅」つまり「秘密曼荼羅」を誦出したとき、これが十万頌能詮の教となるのである。

行法、果法については、改めて述べることにし、龍猛菩薩の塔内に入つて觀見した法界宮殿毘盧遮那如来現証

卒塔婆とはいかなる塔であるかを、大師の記す所によってこれを明かにすることとし、更にこれを表にする。

如来加持広大金剛法界宮とはこれすなわち五仏の異名なり。大日と宝幢と開敷と弥陀と天鼓とついでのごとく配せよ。また次に如来とは大曼荼羅身なり。下の文に説くところの胎蔵の曼荼羅これなり。金剛とはすなわち三昧耶身なり。

第四の巻の所説の密印および標幟これなり。法界とはすなわち達磨曼荼羅身なり。第二第五の所説の種子、字輪等の真言これなり。加持とは事業威儀の身なり。これは三種の身に通ず。広大とはおのの身量虚空法界に同じきことを明す。

故に下の文にいわく、「世尊の身語意は、平等にして身量虚空に等同なり、語意の量もまたかくのごとし」と。

宮といつば、所住処なることを顕わす。今この心王の如来、無始無終にして各々自法界三昧に安住せり。

五 佛					
如来	加持	広大	金剛	法界	宮
大曼荼羅身 胎蔵曼荼羅	事業威儀身（三種の身に通ず）	各各身量、語量、意量 虚空に等同	三昧耶（曼荼羅）身 密印 標幟	達磨曼荼羅身 種子 字輪等の真言	所住所 今この心王如来 無始無終にして各々自法界三昧に住す

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

法界宮殿は、五佛であり、四種曼荼羅身である。身語心量虚空に等同の心王の如来の無始無終に各々自法界三昧の安住する所住所である。殿は、身心互いに能住所住となることを意味している。では、龍猛菩薩とともに法界宮殿毘盧遮那現証塔に入って内からこれを観見することとする。それには、弘法大師が

この法界性身の大日如来、五智所成の四種法身、金剛薩埵等の塵数の諸仏眷属とともに、あるいは法界宮に住し、あるいは普賢心殿等の中に住して、常恒不斷にこの金剛一乘の真言秘藏を演説したもう。と釈している平城上皇灌頂文にひく「分別聖位經」の次の文を用いることとする。

法性身の仏は心より無量の諸仏及び無量の菩薩を流出す。みな同一性なり。いわく金剛の性なり。遍照如来に対して灌頂の職位を受く。彼等の菩薩、おのおの三密門を説いてもつて大日および一切如来に対して、すなわち加持の教勅を請う。大日尊のたまわく、「汝等将来に無量の世界において、最上乘者のために、現生に世出世間の悉地成就するを得しむ」と。彼の諸の菩薩、如来の勅を受け己つて、仏足を頂礼して、大日仏を圍繞し己つて、おのおの本方本位に還つて、五輪となつて本標幟を持す。もしは見、もしは聞、もしは輪壇に入りぬれば、よく有情輪転の生死の業障を断じ、五解脱輪の中において、一仏より一仏に至り、供養し承事して、みな無上菩提を獲得して、決定の性を成ぜしむ。なおし金剛の殂壊すべからざるがごとし。これすなわち大日聖衆の集会なり。すなわち現證塔となる。一一の菩薩、一一の金剛、おのおの本三昧に住して自解脱に住し、みな大悲願力に住して、広く有情を利す。もしは見、もしは聞、ことごとく三昧を證し、功德・智慧頓集成就す」

これが龍猛菩薩が、法界宮殿である毘盧遮那如来の内部に入って観たところの光景である。そういったらどうであろうか。現証塔はもとより法爾の塔で毘盧遮那如来も法爾所起の曼荼羅人である。これを説く真言の法も法爾であるところを

「この真言の相は一切諸仏の所作にもあらず、他をして作らしむるにもあらず、また随喜したまわす。何をもつての故に。この諸法は法としてかくのごとなるをもつての故に、もしくはもろもろの如来出現し、もしくはもろもろの如来出でたまわすとも、諸法法爾としてかくのごとく住す。いわくもろもろの真言は法爾ほうにの故に」としているのである。

これは、法佛恒説の所詮の法の法爾について言われたところであるが、塔内の光景とした現証塔についての金剛頂經の文は、龍猛菩薩誦伝の能説の經である。したがって「無量の菩薩を流出す」「大日仏を圍繞し己つて各々本方位に還つて五輪となつて本標幟を持す」「五解脱輪の中において、一佛より一佛に至り、供養承仕す」等、すべて時間経過によつて記載している。法界に於て常恒普遍に演説されている金剛頂經十万頌も、能詮の經として説かれる限り時間経過の中で述べられざるを得ない。しかし、実際には、能詮の經に説かれるところも「三時を超えたる如来の日の加持の故の身語意平等句の法門」として読み取らなければならない。「三時を超えたる如来の日」、「一時」と読みとることを「本有による」と言い、ここに於てはすべて「俱時」である。

これに対して時間経過の中での記述を「次第に約す」としているのである。次第に約して述べられた經を本有によつて読むとき、金剛頂現証塔の文を以て、塔内の光景と敢えてするところである。ところで「輪壇に入る」とは、法爾の法曼荼羅に入ることであり、南天の鉄塔に入るとは、この輪壇に入ることである。龍猛菩薩が法曼荼羅に入つたことが、金剛薩埵から灌頂の職位を受けたことである。塔内のことは「俱時」のことで、法佛恒説の法爾の十万頌の經は、

次に『經』にいわく、「いわゆる三時を越えたる如来の日、加持の故に身語意平等句の法門なり。時にかの菩薩には普賢を上首となし、諸執金剛には秘密主を上首となし、毘盧遮那如来加持の故に、身無尽莊嚴蔵しんむじんしょうごうぞうを奮迅示現ふんじんじげんし、かくのごとくの語意平等無尽莊嚴蔵を奮迅示現したもう。毘盧遮那仏の身あるいは語あるいは

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

意より生ずるにあらず、一切処に起滅辺際不可得なり。しかも毘盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切処、一切時に有情界において真言道句の法を宣説したもう。また執金剛・普賢・蓮華手菩薩等の像貌を現じて、普ねく十方において真言道清浄句の法を宣説したもう。

の「一時」に於て誦伝、能詮の経として誦出されたのである。それ故に弘法大師は、「この経（金剛頂経）および大日経は、龍猛菩薩南天鉄塔より誦出するところの如来秘密藏の根本なり」とし、あるいは、「妙雲開塔の朝、金薩灌頂の時、三密の秘藏は大虚を曜し、五智の大我は妙相を湛えてもって靈台に座す」等、密教流伝の根源としてその著作に多く記するところである。

南天の鉄塔は、法界宮殿毘盧遮那現証卒都波であり、大日如来の法性塔すなわち、毘盧遮那法界体性塔である。如来秘密藏の根本である法界体性塔が、後に根本大塔と稱されたところであって、弘法大師創建大塔が南天鉄塔に擬したと伝承のあるのは、これに起因するとすれば首肯出来るところであり、南天鉄塔の塔の形を写したという事ではない。

久米寺の塔は、方三間でありながら、方五間の塔に匹敵する巨大な塔であった。この塔は、高さ八丈で南天鉄塔の半分を移したと久米寺流記が伝えている。これは南天鉄塔が十六丈であったという伝承があったわけではなく、むしろ高野山大塔の南天鉄塔説から逆に南天鉄塔の高さを十六丈としたものであろう。しかし、久米寺の塔は、大師大日経感得と伝えるにふさわしい巨塔であったのである。

さて南天鉄塔が事塔か理塔かが近年まで一つの問題であった。（十二）しかし、大師が、特に設けた問答決疑の法界宮殿毘盧遮那如来現証卒都婆により既に決していることであり、今また、現証塔について、いささかこれを明らかにしたので理塔であることは更に明確になったと思う。

梅尾祥雲博士が、大正十三年に、アマラヴァティの大塔の塔跡を調査し、この塔が南天鉄塔との考証を発表さ

れていることは、畏敬すべきことであるが、理塔であることは、広付法伝によって明了で動かしようもないことである。鉄塔相承が、伝えられた時、誰しもが、或る塔をそれと思い合わせる塔がいくつかあったとしても不思議ではない。それはモデルとして、一つの標幟として見るべきであって、鉄塔であることも、鑄造の巨塔が実在しないが故に、鉄塔相承の説かれたところが直ちに理解された筈である。いずれにしても「機にあらざれば伝わらず。」とすべきであろう。

秘密曼荼羅である法爾の法は、能詮の経として流伝したが、これは行法として修されなければならない。行法によって果法がある。

弘法大師が、この行法が顕密の相違するところとしてこれを説いたものに「勸縁の疏」と伝教大師へ宛てたとする書翰とがある。一つは、密教の經典は書写読誦だけでなく、如説修業、如理思惟することによって三僧祇を経ずしての即身成佛を鮮明にし、他は「秘藏の興廢汝と我に在り」とし、それには如法の伝受がなければならず、加法に信修されるならば、男女を論ぜず、貴賤を簡ばずその器なりとしているのである。

今、大塔の建立を、弘法大師の行法、果法として見ていくに当たり、曼荼羅を、法爾、綵画、行法の曼荼羅として表示しよう。「即身義」に、「金剛頂經」の次の文を引いている。

「四種曼荼羅とは、一には大曼荼羅、いわく一一の仏菩薩の相好の身なり。またその形像を綵画するを大曼荼羅と名づく。また五相を以て本尊の瑜伽を成ずるなり。また大智印と名づく。二には三昧耶曼荼羅、すなわち所持の標幟、刀劍、輪宝、金剛、蓮華等の類これなり。もしその像を画するまたこれなり。また二手をもつて和合し、金剛縛こんごうばくより発生して印を成ずるこれなり、また三昧耶智印と名づく。三には法曼荼羅、本尊の種子真言なり。もしその種子の字を各々の本位に書く、これなり。また法身の三摩地および一切の契經の文義等みなこれなり。また法智印と名づく。四には羯磨曼荼羅、すなわち諸仏菩薩等の種々の威儀事業、もしは鑄、もしは捏ね等またこ

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

れなり。また羯磨智印と名づく。」
即ち、

法爾の曼荼羅	綵画造作の曼荼羅	行法の曼荼羅
大曼荼羅、いわく一一の仏菩薩の相好の身	その形像を綵画するを大曼荼羅と名づく。	五相をもって本尊の瑜伽を成ずるなり、また大智印と名づく
三昧耶曼荼羅、すなわち所持の標幟、刀剣、輪宝、金剛、蓮華等の類	その像を画するまたこれなり。	二手をもって和合し、金剛縛 こんごうばく より発生して印を成ずる。また三昧耶智印と名づく
法曼荼羅、本尊の種子真言なり。	その種子の字を各々の本位に書く。	法身の三摩地および一切の契経の文義等 また法智印と名づく
羯磨曼荼羅、すなわち諸仏菩薩等の種々の威儀事業。	鑄、または捏等またこれなり。	また羯磨印と名づく

綵画造作の曼荼羅は、能詮の経によって行法のために造られたものである。法爾の曼荼羅は如来の三密であり、行法の曼荼羅は、行者の三密が如来の三密と相応する三密加持である。

三密とは一には身密、二には語密、三には心密なり。法仏の三密は甚深微細にして等覺十地も見聞すること能わず、故に密という。一一の尊等しく刹塵の三密を具して互相に加入し、彼此摂持せり。衆生の三密も

またまたかくのごとし。故に三密加持と名づく。もし真言行人あつてこの義を観察して、手に印契いんげいを作し、口に真言を誦じ、心三摩地に住すれば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得。

「この毘盧遮那仏の三字の密言共に一字にして無量なり。まさに印・密言をもつて心むねを印すれば、鏡智を成じて速に菩提心金剛堅固の体をう。額を印すればまさに知るべし、平等性智を成じて速に灌頂地の福聚莊嚴の身をう。密語をもて口を印するとき、妙觀察智を成じてすなわちよく法輪を転じて仏の智慧身を得。密言を誦じて頂を印すれば、成処作智を成じて仏の变化身を証し、よく難調の者を伏す。この印密言によつて自身を加持すれば、法界体性智毘盧遮那仏の虚空法界の身を成ず」

弘法大師は、大師の行法によつて、自身に成ずるところの、この法界体性毘盧遮那佛虚空法界身を、毘盧遮那法界体性塔として、二度の結界により都大道場法壇を建立し、この大曼荼羅の上に、法界塔婆であり大師の心塔である二基の大塔を建立しようとするものであった。壇場には、三宝である一切十方法界の諸佛世尊と般若波羅密多と諸の菩薩衆の諸の徒衆を領するとが供養された。大塔建立は高野開創の第一義であり、一切秘密法藏難思議法門の決定であつたから、講堂の建立が大体になつたと思われる弘仁十一年六月一日大塔心柱が虎峰に於て伐られ、六月二十八日には壇上に搬入されたのである。

なお、大塔が金剛界曼荼羅の大日如来の標幟を像つたことについては、綵画の曼荼羅が行法のために綵画されたものであるから、単に図絵の曼荼羅の塔を像つて建築したものではないことは、大師が自身に成じた「法界体性毘盧遮那佛虚空法界身の建立」によつて知り得よう。人迹なお極めて稀な高野山上に十六大菩薩生の十六丈を以て莊大な大塔としたことも、これによつて推測されるところである。

大塔は、弘法大師の行法として建立された塔であり、果法の塔である。果法は大師の言う「法爾の莊嚴が割然として円に現じ本有の万法、森羅として頓証した」ところのものである。この果法を、大師の誓願の系譜をたど

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

って明らかにしたい。

高野開創の最初の結界に当たって

「それ有形有識は必ず仏性を具す。仏性、法性は法界に遍じて不二なり。自身他身は一如と与んじて平等なり。これを覚るものはつねに五智の台に遊び、これに迷うものはつねに三界の泥に沈む。この故に大悲大日如来、ひとり三昧耶の妙趣を鑒みて、六趣の塗炭を悲歎したもう。」

と、大日如来の大悲の由って来るところをこう啓白された。密教の相承者としての大師は、また大日如来の大悲を嫡々に相承されたのである。(十二) 大師の群生の拔苦与樂の誓願は惠果和尚の付法に発し(十四)、生涯を貫かれ、しかも「虚空尽き衆生尽きなば我が願いも尽きなん」とされたものである。顯教においても衆生拔済はいうところであるが、大師のそれは大日如来の大悲悲愍したもうところにより、如実智の法雷、法界の殿に震って伝えたところの秘密の曼荼による拔苦与樂の誓願である。

師惠果和尚が、早く郷国に帰って、密藏を天下に流布せよとしたところのものも「蒼生の福を増せ」であった。かくして帰朝された大師が、帰朝の翌年大同二年 田小武(太宰府次官)の先妣の追善を修した願文に於て、「この徳海を傾けて梵魂を潤洗せん」と法要の趣旨を述べた後に、「五類の提婆十方の数生に 同じく一如の宮殿に遊ばん」と法要の功德の更に十方の数生に及ぶことを祈念しているのである。弘仁六年、式部笠仲守が先考の追薦のため懇田一町を施入した折りの願文に於ても

謹んで弘仁六年十月十五日を以て懇田一町永く燈分料に奉る。慧燈星のごとくに懸けて癡暗雲のごとくに巻かん。智光月を朗かにして覚威日を赫かさん。伏して乞ふ、この善業に籍りて四恩を翊け奉り、覚苑を優遊して禪林に放眩せん。毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同じく平等の仏性を鑒みて、忽ちに不二の大衍を証せん。

と、祈願の主旨を述べ終わつた後に、毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、と、ただ有情非情とするのではなく、四恩の一々を具体的に列挙しているのである。「菅平章事の為の祭文」にも

ここにすなわち、海目の慈悲、山毫の光曜、刀劍智を孕み、矛戟魔を摧く。玉幡玲玲として宝蓋颯颯たり。この徳海を翻して四恩を洗滌せん。三障霧のごとくに巻き、四智月のごとくに朗かならん。溺海を超越して、宝岸に躋り攀ぢん。国は鬱単よりも隆んに、人は非想よりも寿ながからん。九野を絡ひ幕め、十方を牢籠して蠓飛蠕動毛鱗角共に平等の智水に沐して不染の蓮藏に優遊せん。

蠓飛蠕動、毛鱗角、と列挙している。これは大師生涯の願文に通じて見られるところで、願文だけでなく、密教弘通のための經典の書写を依頼したものである「勸縁疏」においても、その末尾に

「六道四生はみなこれ父母なり。蠓飛蠕動仏性にあらざることなし。庶わくは無垢の眼を豁かにして三密の源を照し、有執の縛を断じて五智の觀に遊ばしめん。」

と、書き加えている。否、決して書き加えているのではなく、これこそ密教の要諦を示しているのである。「三僧祇を経ずして父母所生の身に十地の位を超越して心仏に証入せん」とする所は、蠓飛蠕動に及ぶのである。蠓飛蠕動を平等と見るのは、ただ理としてではなく、「大日如來の三昧耶の妙趣に鑒る」ところなくしては不可能なのである。

これによって、密藏の弘揚と群生の拔済とは表裏一体のものであるのが明らかである。

高野山建立初結界於て「今、上は諸仏の恩を報じて、密教を弘揚し、下は五類の天威を増して、群生を拔済せんがために、もっぱら金剛秘密乘によつて、両部曼荼羅を建立せんと欲う」と啓白されたのである。両部大曼荼羅の建立が群生拔済であり、それは金剛秘密乘によらなければならない。高野開創が群生拔済そのものにあるのである。

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

「勧進して佛塔を作り奉る知識の書」は

それ諸仏の事業は大慈をもつて先とし、菩薩の行願は大悲をもつて本とす。慈よく樂を与え、悲よく苦を抜く。拔苦与樂の基、人に正路を示すこれなり。いわゆる正路に二種あり、一には定慧門、二には福德門なり。定恵は正法を開き、禪定を修するをもつて旨とす。福德は仏塔を建て、仏像を造るをもつて要とす。三世の諸仏、十方の薩埵、みなこの福智を営みて仏果を円満す。

この故に比の年、四恩を拔済し、二利を具足せんがために、金剛峯寺にして毘盧遮那法界体性の塔二基、および胎藏金剛界兩部曼荼羅を建て奉る。しかも今、工夫数多くして糧食給きがたし。今思わく、もろもろの貴賤四衆とこの功業を同じくせん。一塵大嶽を崇くし、一滴広海を深くする所以は、心を同じくし力を勦するが致すところなり。伏して乞う、もろもろの檀越等、おのおの一錢一粒の物を添えてこの功德を相済え。しかれば當むところの事業不日にして成り、所生の功德万劫にして広からん。四恩は現当の徳に飽き、五類は幽顯の福を饒にせん。同じく無明の郷を脱し齊しく大日の殿に遊ばん。敬つて勧む。」

大塔は、大師が四恩を拔済し、二利を具足するために建立された。人に、福德、定慧二門をもつて正路を示す塔であり又、とりもなおさず、諸仏の事業、菩薩の行願の具体であることが明らかである。かかる塔として建立し得る所のものは、大師の行法によるものであり、この故に建立された塔、毘盧遮那法界体性塔は大師妙行の句、果法の塔である。

天朝九年、初めての萬灯萬華会が高野山にて勤修され、兩部大曼荼羅、四種智印に奉献された。

四種智印も現証塔たる毘盧遮那法界体性塔である。

恭んで聞く、黒暗は生死の源、遍明は円寂の本なり。その元始を原ぬればおのおの因縁あり。日燈空に擎げて唯一天の暗を除き、月鏡漢に懸けて誰か三千の明をなさん。大日遍ねく法界を照し、智鏡高く靈台に鑑

みるがことに至つては、内外の障りことごとく除いて、自他の光普なく挙ぐ。かの光を取らんと欲わば、何ぞ仰止せざらん。

ここに空海、もろもろの金剛子等と金剛峯寺に於て、聊か万燈万花の会を設けて、両部曼荼羅、四種の智印に奉獻す。期するところは毎年一度この事を設け奉つて、四恩に答え奉らん。虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん。しかればすなわち、金峯高く聳えて安明の培樓を下し睨、玉毫光を放つてたちまちに梵釈の熾日を滅さん。濫字の一炎たちまちに法界に飄つて病を除き、質多の萬華咲を含んで諸尊眼を開かん。

大師が誦する誓願の文は、大塔が発する声のように風鐸の響きの中に

仰ぎ願わくは、この光業によつて自他を拔済せん。

無明の他たちまちに自明に歸し、本覺の自たちまちに他身を奪わん。無尽の莊嚴、大日の恵光を放つて、刹塵の智印朗月の定照を發せん。六大の遍ずるところ、五智の含ずるところ、虚を排い地に沈み、水を流し林に遊ぶもの、摠べてこれ我が四恩なり。同じく共に一覺に入らん。

と、法界に限りなく鳴り渡るのを聞く思いがする。

金峯高く聳える大塔は玉毫に放つ光りに、定慧福德の正路を示して、安明の培樓を下し見て建てば、これを一礼一瞻するものは、慧劍縛を断つて、若しくは智、若しくは讚、智宝福を与うる功德聚である。

衆宝の心殿は高広にして無辺なり。光明の日宮は遍ぜずというところなし。真言の大我は本より心蓮に住し、塵沙の心数は自ら覺月に居す。三等の法門は仏日に住して常に転じ、秘密の加持は機水に応じて断ぜず。法性の身塔奇なるかな、大なるかな。

聳えたつ十六丈のこの大いなる大塔は「たび観たび礼するものは罪を消し、福を積む」(十五) 恵果和尚

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

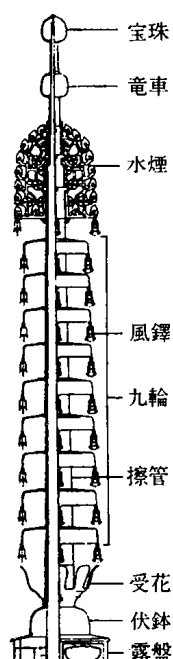
伝燈の大塔である。

付記 ―大塔の「多宝塔」という呼称について―

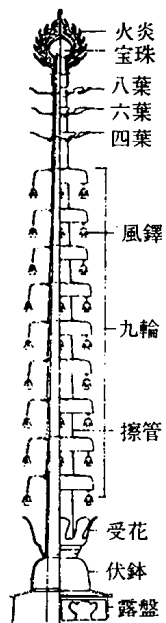
高野山大塔を起源として多宝塔の名称が起こった。法華經宝塔品に由来するものではない。假に高十六丈。一層之勢寔勝数重塔。とした康和再建の塔に涌現の大塔を眼前にする感歎を以てしたとしても、大師誓願の大塔を建造の上でも忠実に再現した康和の大塔に於て、その理念をよそにして、宝塔品の多宝を以てこれに当てることはあり得ない。

法華經の塔に二種ある。その第一は舍利塔を排しての經塔で、法華經が起塔の功德を説く塔がこれである。第二が後世多宝塔と称される見宝塔品の塔である。法華經の中には第一第二何れの塔をも多宝塔と呼称していない。伝教大師の起塔は第一の塔であつて第二の塔ではない。伝教大師が自ら六処宝塔を多宝塔と称したとすれば、それは第一の塔に対するものであつて、見宝塔品の塔とは無縁である。第一の塔を美称して多宝としたものである。根本大塔を多宝塔としたことは、宝塔の更なる美称にとどまるものではない。

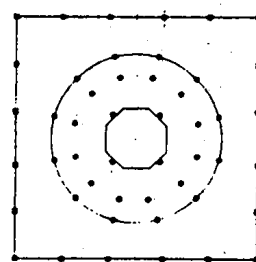
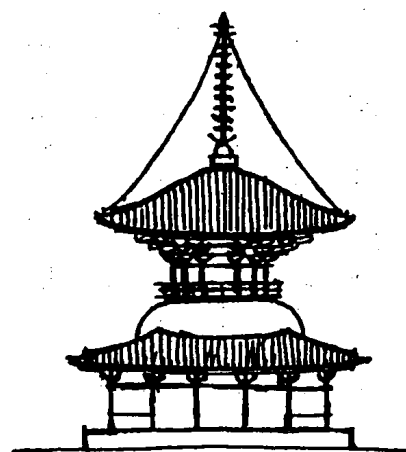
既に壇上結界に於て「有情を繞益」するために南方宝部金剛軍荼利菩薩の法に帰命して修法し、その証成を、三部果徳の尊である金剛藏王菩薩をはじめとする聖衆に祈念したのである。宝部は能断で、有為有漏の貧困を断じ、よく無尽莊嚴の庫藏を得るところである。それ故に、弘法大師果法の塔である四種曼荼羅身の大塔を多宝塔と称する所以を次の金剛般若總密經解題の「福德甚だ多し」等を釈した文でもその一端を知ることができよう。「福德とはすなわち四種法身の相好、四種曼荼羅身の相好等皆福聚というごとし」と。根本大塔は無尽莊嚴の庫倉、福聚多宝の四種曼荼羅身にはかならない。



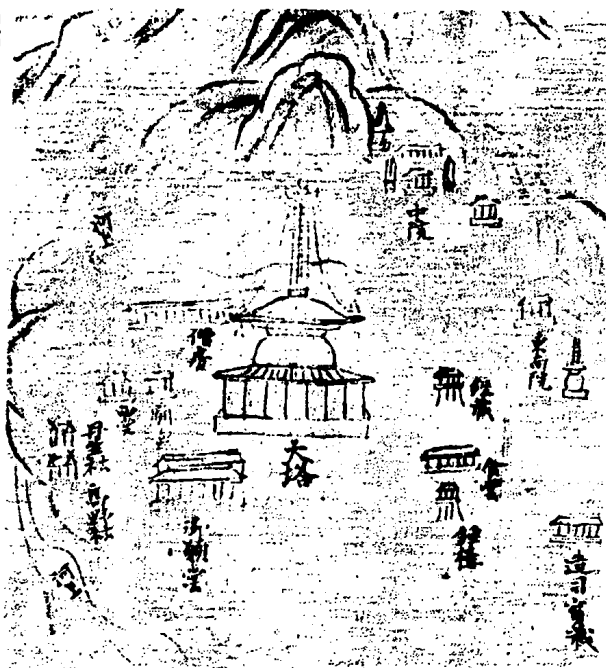
層塔相輪



大塔相輪



創建大塔復原見取図



御手印縁起二種の塔様

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顯密二種の「多宝塔」

註

密教の塔としては、両界曼荼羅に三昧耶形塔がある以上この塔様の塔が密教の塔として存在した可能性は高い。この形の塔を宝塔と稱している。宝塔は塔一般の美稱であるが、この形式の塔が多く造られるようになったことから江戸時代になって、この形の塔を宝塔と呼ぶようになった。

佛三昧耶形の塔を宝塔形としたことの意義は大きい。龍猛菩薩の時代にも塔は既に多様化していたと思われるが、原初のストゥーパを基本にした宝塔形を佛三昧耶形としたことは、塔の理念の上からも見逃すことはできない。

「広付法伝」に恵果和尚によつて塔の内外の壁に両界曼荼羅が図繪されていたと記されている。塔様知ることはできないが、密教の塔である。両界曼荼羅を描くことは、弘法大師によつても継承された(後述嘉保康和再建塔参照) 現在醍醐寺の五重大塔にこれを見ることが出来る。

大師以後の入唐僧達も密教の唐様を示す記録は見られない。

梅尾祥雲博士はアマラヴァティ大塔の塔跡を早くに調査し、これを南天鉄塔として考証しておられる。これによればこの大塔は密教の塔ということになる。しかし宝塔形佛塔ではない(アマラヴァチ塔と南天鉄塔密教研究十六号)

密教の曼荼羅風に佛塔を配置したものにボロブドールの遺跡がある。下壇から釈尊の前生譚、佛伝図、華嚴經入法界品図と次第に上壇に至り更にその上を四段に築いて最上壇中央に大佛塔を安置、これより一段下げて十六のバスケット状のストゥーパを円陣に配し、中に一体ずつ石彫の佛像が納められていた。この中に四佛も見られるが、両部の四佛とは、触地印以外合致しない。密教的ではあるが、密教の曼荼羅とは別であろう。このネットのストゥーパを中台八葉院の形に配したものとあるという(J.KROM ARCHAEOLOGICAL DESCRIPTION OF BARABUDUR) 胎藏曼荼羅であるかどうかは確認されていない。

註

(一) 多宝塔形佛塔を最初に「多宝塔」と稱したのは、康保五年(九六六)の「金剛峯寺建立修行緣起」である。この中で、高野山大塔を「今記云。多宝塔一基。高十六丈。一層之勢、勝數重塔」と大師御在世のこととして記し、又、西塔については、九丈多宝塔一基。奉安置八尺大日。五尺四佛(中略)已上三、真然僧正仁和三年丁未依勅之。仁和三年は西曆八八七年である。塔形については、確認できないが、天曆元年(九三二)に、その本尊の金剛界五佛が造立供養された勧修寺塔は、「多宝塔」と稱されていた。この塔が多宝塔形とすれば、文献的に一番早いことになる。(本稿第一部に既述)

註

(二) 「覚源抄」に「結塔印。顯五佛給。然塔印南向塔給顯也。塔南天鉄塔是也。亦高野大塔南向是移彼鉄塔意。」真言宗全書二六・五三二

註

(三) 清水清晃著「高野山根本大塔の研究」

註

(四) 大塔数度の再建に於ても順次以前の塔に準拠して建立されてきたはずであるが、中世には基壇式ではなく根来の塔のように四方に縁を回す形式となっており、細部に於ては変更されて推移してきたこともやむを得ない。

註

(五) 昭和再建は大正十四年木造塔で計画され、後、鉄骨鉄筋コンクリート造りと変更。設計は天沼俊一博士。昭和再建については、立面図平面図も掲載されている河野浩晃師前掲書に詳しい。

康和再建大塔は五か年で塔の建築を完了している。(本稿後述)工程的には御在世中の完成も可能であったが、これを拒んだとすれば塔建立の資金の問題であつたろう。

『塔婆建築の研究』足立康著作集 三 「高野山大塔とその本尊」に於て貞観三年以前には存在していたと推定。これに対し『寺院建築の研究』下 福山敏男著では、大塔の創建・完成年代は不明としている。

註(六)

a 足立康博士 前掲書

b 清水擴博士 平安時代佛教建築史の研究

c 「多宝塔の性格と形態」

a 著の解説 太田博太郎博士

足立説を清水説で一部修正、更にcに於て太田博士が両説に対して、批判している

註(七)

亀腹という名稱はあまりふさわしくなく「宝塔頭頂部」と稱するのがよいであろう。石山寺、浄土寺、金剛寺の多宝塔では、これを初層の横断面の正方形に内接する程大きくして、三昧耶形塔であることを強調している。根来寺大塔もほぼ同じで、昭和大塔は、かつて高野山大塔にならって建立されたとする根来の大塔を範としたため現在の形となったものである。金剛三昧院塔は、復原図のように、水輪柱の位置を予想して、少し内側に収めている唯一の塔である。この他の多宝塔では、亀腹を小さく形式的につけて、宝塔頭頂部であることを表わしているものが多い。

註(八)

御手印縁起の図に、上層の屋根の下り棟が外側に反るむくりになっている。復原図もこれによったものである。現在の多宝塔に於ては、この屋根の形はないので、覆鉢を以て風輪とする。

註(九)

密教大辞典「大塔の大事」

河野清晃氏の前掲書の「根本大塔と密宗教義」に「大塔は、**五**字所成の塔であつて、内の円なるは、**五**字水大の形即ち金剛界であり、又外の方なるは、**九**字「本文」とあり筆者訂正」地大胎藏であり、すなわち両部不二の塔であると、塔の形そのものを教義に合わせて両部不二と言うのである。」

続いて杲宝の秘藏記私抄の文を次のように掲げている。

「卒都婆者、鏤一字所成、又阿卑羅咩劍の所成なり、任取に云云、言ふ所の鏤一字の所成の塔とは、即ち高野山大塔なり、五字所成の塔とは、東寺の五重の塔此を標す也。」

足立康前掲書

註(十)

安祥寺五智如来像の造頭の年代 足立康 建築史第二巻第六号

安祥寺と五智如来像について 金森遵 密教研究八十四号

著者は安祥寺塔は五智如来像が安置されたと推論するのを至当としながら、その場合この多宝塔は、初層の一辺が五丈乃至七丈となり他の佛堂との均斉を破るとして、そのような大きな多宝塔は、貞観時代の安祥寺に存在しなかつとしている。これらは、高野山大塔の理念によって建立された場合、塔は最重要の伽藍であつて、他の伽藍を圧倒するもので支障ないことを見落と

弘法大師の「毘盧舍法界体性塔」と顕密二種の「多宝塔」

していることによる推論である。

註(十一)

都大道場法壇の法壇は、「精霊集私記」に円壇としている。円壇は輪円具足の曼荼羅であるが、ここでは、円形壇即金剛界壇を
観想建立したものと解釈した。

註(十二)

・密教大辞典「大日経」の鉄塔相承の項および「大日経鉄塔相承」
・アマラヴァチ塔と南天鉄塔説 梅尾祥雲 密教研究 第十六号
・真言密経の起原伝来 金山穆韶 密教研究 第七十三号

註(十三)

弘法大師は、大日如来を高祖法身と呼び、又「大師」と稱している。恵果和尚より之瀉瓶相承は、又大師大日如来よりの瀉瓶
相承の想いがある。

南天鉄塔相承を記すについても龍猛菩薩が鉄塔中に入ることを需めたのは、一切法蔵を受持して群生を利済するためであった
としている。

註(十四)

弘法大師は、弘付法伝に「受くるところの錫施は一錢を貯えず、すなわち曼荼羅を建立し、これが弘法利人を願う」とし、つ
づいて「常に門人にいつていわく、金剛界大悲胎蔵両部の大教は、諸仏の秘蔵、即身成佛の路なり。あまねく法界に流伝して有
情を度脱せんことを」と記し、更に、恵果和尚の碑には、「貧を濟うに財を以てし、愚を導くに法を以てす」「栄貴を示して、栄
貴を導き、有疾を現じて有疾を待つ、病に応じて薬を投じ、迷いを邪しんで指南す」とその利他について記している。

註(十五)

「広付法伝」に大師は「すなわち曼荼羅を建立し、これが弘法利人を願う、金剛界および大悲胎蔵両部の大曼荼羅および一
の尊曼荼羅を図絵す。衆聖儼然として華蔵の新たに開けるに似たり。万徳輝曜して密蔵の旧容に還る。一たび観、一たび礼する
ものは、罪を消し福を積む」

※相輪の図(二六頁)は塔の建築 浜島正士編より